博士（文　学）　ブガエワ・アンナ

学位論文題名

Grammar and Folklore Texts of the Chitose Dialect of Ainu (Idiolect of Ito ODA)

（アイヌ語千歳方言の文法と口承文芸－小田イト氏の個人語）

学位論文内容の要旨

本論文は、アイヌ語千歳方言を、3 年間にわたる実地調査によるデータに基づいて記述したものである。従来、アイヌ語の研究は、アイヌ語学の開拓者である金田一京助以来、北海道西南部の方言である沙流方言を中心に行われてきた。従って、沙流方言に関しては、多くの話者について様々な研究が約一世紀にわたって積み重ねられてきている。しかるに、沙流方言以外の方言については、信頼の置ける記述が必ずしも多くなく、このことはアイヌ語研究上の大きな問題点となっている。なぜなら、沙流方言は、記述の量が多く、その精度も高いが、これまで知られている限り、アイヌ語諸方言全体の中ではかなり特異である可能性があり、アイヌ語を代表する方言とは必ずしも言えない面があるからである。このような現状にあるとき、沙流方言以外の方言の正確な情報が研究上重要な意味を持つことは明らかである。なかでも、千歳方言は沙流方言と同様北海道西南部方言に属し、音韻、文法、語彙の点で沙流方言と多くの類似を示すことが既にある程度知られているが、沙流と千歳は距離的に 100km 以上も離れていることから、細かな点では相違も数多く存在すると予想される。この点で、アイヌ語研究上最もよく研究されて来た沙流方言の成立を知る上でも千歳方言は最も重要な方言の一つと考えられる。しかるに、千歳方言の本格的な調査、研究が始まったのは 1980 年代半ば以降であり、その全体像は未だ不明の点が少なくなかった。特に、これまでの千歳方言研究が、事実上、ただ一人の話者のデータに基づいていた点にも大きな問題があった。本論文は、その重要性にもかかわらず記述の少ない千歳方言を、これまで知られていた話者とは別な話者（小田イト氏）との実地調査によって、言語事実を詳細に記述したものである。また、その記述の基礎資料となっている口承文芸のテキストのすべてを、話者からの聞き取りに基づいた詳細な調査結果と共に示して、根拠を明示している。なお、本論文は、英文 A4 版シングルスペース全 479 ページ、内、第 1 部 104 ページ、第 2 部 375 ページの分量である。

本論文は 2 部からなる。第 1 部はアイヌ語千歳方言の文法概説、第 2 部は訳注付きの千歳方言テキストである。

第 1 部第 1 章では、アイヌ語一般に関する概説と千歳方言の研究上の位置付け、及び著者の実地調査の概要が述べられている。

第 2 章では本稿で用いられている特殊な記号、略号の説明がなされている。

第 3 章では、音韻、音節構造、アクセント、わたり音挿入とわたり音化、音素交替について述べられている。

第 4 章では、文法構造が述べられている。語順、格関係、名詞、動詞の語形変化に関する基本的な説明の後、名詞の人称変化、人称代名詞、動詞の種類、動詞の人称変化、動詞の派生、否定、疑問、命令の諸形式、関係節化のプロセスが、得られた実例を元に記述されている。

第 2 部は、アイヌ語で語られた口承文芸のテキスト 15 篇からなる。これらのうち 9 篇は散文の昔話(uwepeker)のテキスト、6 篇はメロディーを付けて語られた神謡(kamuyyukar)のテキストである。すべてのテキストについて、話者からの聞き取りに基づいた詳細な註と英訳が付されている。また、テキストの全語彙及び主要接辞の索引を付し、さらに口承文芸の音声資料をＣＤとして添付している。

以上の記述により、本論文は、千歳方言、特にその下流部方言の全体像を、音韻、文法の両面について、一次資料に基づいて実証的に明らかにしている。

学位論文審査の要旨

主　査　　助教授　　佐　藤　知　己

副　査　　教　授　　小　野　芳　彦

副　査　　教　授　　津　曲　敏　郎

学位論文題名

Grammar and Folklore Texts of the Chitose Dialect of Ainu (Idiolect of Ito ODA)

（アイヌ語千歳方言の文法と口承文芸－小田イト氏の個人語）

本論文は2部からなる。第1部はアイヌ語千歳方言の文法概説、第2部は訳注付きの千歳方言テキストである。

第1部第1章では、アイヌ語一般に関する概説と千歳方言の研究上の位置付け、及び著者の実地調査の概要が述べられている。

第2章では本稿で用いられている特殊な記号、略号の説明がなされている。

第3章では、音韻、音節構造、アクセント、音素交替について述べられている。注目すべき指摘の例としては、アクセントの対立が存在すること、接続助詞 wa「～して」が p のあとで pa に交替する千歳方言独特とみられる現象が小田氏のことばにも現れること、沙流方言に固有とみられていた、複雑なわたり音挿入とわたり音化の現象が小田氏のことばにも存在することが指摘されている点があげられる。

第4章では、文法構造が述べられている。語順、格関係、名詞、動詞の語形変化に関する基本的な説明の後、名詞の人称変化、人称代名詞、動詞の種類、動詞の人称変化、動詞の派生が、得られた実例を元に記述されている。これらの点について特に注目される指摘の例としては、沙流方言に固有とみられていた、口承文芸テキストにおける1人称単数と複数との明確な区別が小田氏のことばにもみられることが指摘されている点があげられる。さらに、動詞の後に付加される、アスペクトを表す諸形式、モダリティーを表す諸形式の一つ一つについて詳細な記述がなされている。新しい発見としては、アスペクトについては、他の方言や話者にも現れる kor an「～ている」という形式が小田氏のことばにも現れるが、沙流方言や千歳方言の他の話者のことばでは an に有形の

人称表示が期待される場合に、それが現れない例が、言い誤りとは言い切れない頻度で起こることを指摘し、非人称構文的な解釈の可能性が示唆されていることがあげられる。また、モダリティーを表す形式のうち、anan「～が判明する」という助動詞が小田氏のことばにも現れ、沙流方言の aan に対応する千歳方言独特の形式であることが指摘されている点も注目される。

第 2 部は、アイヌ語で語られた口承文芸のテキスト 15 篇からなる。これらのうち 9 篇は散文の昔話(uwepeker)のテキスト、6 篇はメロディーを付けて語られた神謡(kamuyyukar)のテキストである。すべてのテキストについて、話者からの聞き取りに基づいた詳細な註と英訳が付されており、アイヌ語の資料としてばかりでなく、アイヌ口承文芸の研究資料としても有益なものとなっている。なお、テキストの全語彙及び主要接辞の索引を付し、さらに口承文芸の音声資料をＣＤとして添付していることは、本論文の学術的資料としての価値を一層高めるものである。

本論文の主要な研究成果は、次のようにまとめられる。1) 資料の少ない千歳方言を、これまでほとんど調査されていない話者について、実地調査を行い、一次資料に基づいて全体的な記述を行ったこと、2) これまでの研究では、千歳方言は、沙流方言との多くの類似を示す一方で、見いだされた相違点については千歳方言に特有な現象なのか、何らかの偶然的な要因に基づくものなのか、一人の話者に基づいた研究であったために必ずしも分明でない点があったが、本論文によって、それらの相違点の多くが偶然的な要因によるものでなく、千歳方言に固有の特徴である可能性が高いことがはじめて実証的に明らかになったと言えること、3) 本論文が依拠している資料の話者は千歳川の下流地域の出身者であり、これまで知られている千歳方言の話者が上流地域の出身であることを考えると、本論文は、千歳方言内部における変異を考える上でも貴重な資料を提供するものと言えること、の三点である。

以上により、本論文は、全体として言語記述の基本に忠実な堅実な研究であると認められ、当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと全員一致して認めるものである。